

新疆旅行記
(七)

至る迄余等と伴ひ其侍従は俄に續けり、内庭の外側にて吾等は相互に最後の禮を交し吾等は市街に下り王は其城中に退かれたなり

東宮御所御構造概

舊用の裝飾は全部舊様の衣裝を録り四國の書庫上棟下に分れ床中央の御堂には緑色の鹿革を張り、前後の別室には新聞紙貼をも蔵むる設備あり天井は色硝子とも自在に光線を導きり
球廊より舞路室に入れれば寄木張りの床は鏡を胸がさ壁は百歩燭燦たる模様の織物で綴じられた障子は透燦たる模様を映へて

續て御内府、御衣庫、御湯敷等者妃下御
用の御室、大空な御化粧の間の天井には
前記、民衆の腰の間に油桶を仰く、皇太后
下御常用の裏御寄寄は、公式御所の現存
の稍小なるものにて、鋸縁製鐵厚銅金象
徹の御紋章、大理石柱、純白大理石の床
その御寄寄に記せるものと相同じ西御寄寄
は亦た東御寄寄と異なることなし
地下室は重に機械室にして蒸氣室、換氣室
廚房等々無數の電線、水蒸氣、換氣筒な
ど天井を通じ厨房の設備は最も最新式の
依煤煙の如き竈の下方に通じて煙突に逸

此處麗なる門番は内庭を通り抜け、一字形の高き客室へ吾等を案内せり。此室の垂直にして残りの二翼は、直角に他方と續けるが、中に樂人及婦人の爲めに設けたる高臺を、概ねわたり、王は吾等と會はるゝ爲め内庭より小室の入口に來り、其兩手を以て余の右手を握へ之を其襟衣の上より胸に壓せり。此挨拶を余は驚かざるものなりき。余は彼の

天井の清輝に高麗の四邊に立てて、如月
にそれく異色の煙を吐きて五雲天を影れ
る光景を描き其四邊には電燈裝飾をさへ施
したるさへあるにサンデリア水晶の珠璣燦
更に天井より垂れて魔光滿室に輝き流れり
右手窓寄りの中程に玉座、其左右は皇族の
御椅子を据え窓寄りの壁の間に高く音楽室
を吊りたる向に聳かるべき装置なり誠に是

し去る装置となり居れり
東宮御所の御構造は大略右の如く其當代文
明の粹を鑑り東西技工の能を盡せることは
申す迄も一房、室、其美を有し一器一
具其美を盡せるのみならず地下室の装置
に於て各室温度を異にすること、自在な
り云ふ前に日本始めての大建築美術と申
し稱へまつべきもの(完)

手が隙胸の貴族のそのの如く白く且つ鱗が
なるを見たり去れど吾等の驚きしは彼の衣
那服を着せることなり城外にて見たりし回
教使は全く眞栗りの衣服を着し且羅馬加熱
利安堂の眞正の鐵く御指輪に著する高き四角
の頭巾を被り其頸裏も亦似く割れる然りと
王及其侍従は全く支那式の服裝をなせり吾
等と導かれて長椅子に坐せしが王は脱掛袴

より人間の策の及ぶべき所にあらす
舞踏客外の衆下を横はれ既に配せし妃嬪
下の御衆間所にして左へ西一の間、二の間
三の間となるなり先きに拜したる皇太子殿
下の御衆間所に比すれば彼は遠隔にして此
は清涼、壁柱多く金色を用ひす而かも御書
細御用卓など皆葡萄の木にて作られ精巧な

然る其の躊躇は餘りに突飛なる誹りを免る
くを得ずすれば契約者は大に驚きて更に契
約の繼續を躊躇する者あり新契約者亦頗る
少しと聞くさもある可き事なり然ればとて
吾人は其保險率が果して正當以上なりや否
やは知る所にあらず其從來の行動が如何に

子に摩^サし五人の侍従は盛裝して恭しく王の寶鏡に起^タりて朝^{アサ}て茶の運^ハばるゝや王は美しき白^{シロ}の角砂糖を置^カれる二の盆を取り之を徳^{トク}の匙^シにて撚^ネる計り吾等の茶碗に満^ミたし更に匙にて茶を混^マせしめて飲^ノめり其は實^{ホト}に許^イかなる茶を混^マせたる砂糖水なりき王は支^チ那服を着し支那の儀禮を守ると雖も官話の智識甚だ乏しく通譯を呼^ヨびさるべからざる程

色の織物でも張られたる亦是し清濁の越き違へて
拜せられぬ西三の間の変は東三の間の変の
ものと相對して彼は油繪、此は日本畫の牡
丹に孔雀の圖とは西陣の織物に仕立てたる
もの亦た遠慮互に相發するの妙を得たりと
も申さんか、是にて全く階上を拜し終れり
階下は裝飾猶ほ未だ終りを告げず先づ大陪

も無定見らしく見て協定率引上も亦餘り
に突飛なるを以て不安心を感ずるなり何を
か無定見と云ふ昨年五月以前は姑く措て問
はざる可し五月に最低率を協定する際には
十分なる研究を遂げ自己の營業としても不
當の利益あり社會一般の爲に謀りても不
ならざる率を選びたる筈なり然るに僅々半
年に過ぎずして其の二倍に引上ぐるとは何

なりき。楊君は王の最も熟せる言語は土耳古語ならんと云へりしが若し土耳古語が「チュラン」中及東土耳古斯坦の此等の地方に於て實際に行はるゝものとせば彼の言は正當なりと雖も若し然らずとせば王の熟知せる言語は「チュラン」語ならざるべからず彼の小亞細亞に行はるゝ土耳古語よりも寧ろ却て西西亞語や波斯語の方親しかるべき

段下り大石モザイクも張られたる
表廻廊の花模様を踏みつゝ處々として大石
石柱の間を過ぎ寢室かの襖御座内室寢室
等を経て先づ妃殿下御柱の間御内房御
衣庫 御湯敷 御寢室等を拜し總て裝飾取
付中なれば其詳細を知るに由なし御化粧
間の油繪は故後井御伯が渡部常也氏と共に
丹精を凝したる群燕の圖にて現に残され

事を言ひし先の協定率は過低に失し到底營業を維持する能はずとの確實なる計算に出でしとせば吾人は單に其の過去の無定見を責むるに止めて將來に關しては大に同情を寄するに躊躇せざる可き不幸にして吾人は此の引上に確實なる根據なりて然るしを認むる能はず只一時偶然起りたる函館の大火に驚愕せる餘りに出でたるに非ずや

等なり吾等に王に吾等の來意を語りたる後
 王の寫眞を撮ることを許さるゝや否やを尋
 ねたるに王は余は回教徒にして余の宗教は
 提庇を許さずと言ひて之を拒みたりしが城
 外より王城の早取寫眞を撮ることを以許さ

てあり 仰げは彌生の交長閑かに霞わたれる心地あり 御居間の御椅子は金華出織もて張られたり 皇太子殿下の御居間も妃殿下のと大差なく 入口は樂器を浮出させたる装飾あり 屏を排

どの形跡あり夫れ社會に火災あるは豫期す可き事なり既に火災ある以上は大火ある可きも亦豫じめ期す可き事なり何となれば火災保險は火災あるを豫期するが爲に起れる事業なればなり火災あるを豫期する事業に

是れ皮相の見なり保険料は従前ど

其の保障目的物の危険程度は従前
 なきを得るか蓋し契約者にして従前
 なる高價を拂ひて尙保險の契約を爲
 するものは其の危険の程度大なりと
 らるる者多きを思はざる可からず樂
 言未だ必ずしも信憑するに足らずと
 し夫の紡績業者聯合して紡績保險會
 樹の助

名譽勲章は、新設の勲章
 如く、同一の命令はフォーク將軍より
 ナヤコフ少將の語る所に據れば金州の
 千九百年清國內亂の際に固め
 其の堡壘は千九百四年コンドラ
 將軍の命に依り、シユツツツ一等大
 フォーク自身にて築か

立せんすとの議は早くより行はる
 り更に今文京阪神倉庫業者は聯合
 の提議を會社を作らんかと云ふ者あり
 ぞ現在保險倉庫の通り口定見なく
 心して是れに信賴するに足らざるを
 故なりと思ふで京阪神の倉庫より各火
 會社の收受する保險率は年に二十萬
 圓の收取するに比し輕度す可き華
 新業に取りて必ずしも輕度す可き華
 りめしき
 ざりき
 共
 我が確
 レチ
 命令
 命令
 命令

陣地の堡壘に於ける或る改良の例
 敵隊の障礙の如きはブオーク將軍の
 依りて行はれたり。戦闘の始まるど
 敵の砲兵の聲なる勢ひを示せし時
 兵は沈黙し、損失は益増加したる
 ヲブ少將は幾度か援兵の派遣を求
 め其の援兵は僅かは二箇中隊に過ぎ

見地よりすれば、一社會の發達を希望する可し。

吾人は現在營業諸氏が十分に火災保險者の性質を繕へ又其の社會上商業者の地位を充め慎重の態度を以て極けるの位置を認めざるものなり何る面目に經營せる倉庫業者にして新に探るも不慣れたる事業とて到底完全なる可し。

ツレチ
初個人
全軍の
着
退却
を認

ヤコブ少將の言に據れば、彼れは最
 々な退却を認めしが、彼れは早や
 退却するを認めたり。彼れは最初
 たる義勇兵の退却を認めしが、後
 軍の中に正服を着したる下士は第五
 等たり。是等の下士の中には第五
 等たるものありき。ツレヤコブ少將

退却に
 き何だ
 ればな
 有史以來の大畫問「露國陸
 軍の内幕」日露戦争最後の
 悲劇の旅順要塞開城事件
 ③「トレチヤコフ少將の證言」
 トキン 將軍の後、金州を防禦したる
 聯隊長「トレチヤコフ少將立ちて證言」

加へ、彼れの退却中止の要求
 兵員は諸所より呼ばりて「我等は
 命令に接したり」と答へたり全體
 は、第五隊長の退却は不規律に陥ら
 ぬ南嶺嶺に入るや軍樂を奏して退却な
 いや

「退却せよ、低く」

其證言は證據不決定にして頗る明瞭を感ぜざるに
 加ふるに彼れが今日の證言は、
 實際の證言と大に異れり、是れを以て
 言はは始と聞けり、（疑はれり） 判士長初め判士、
 辨護人は同一の職闘狀況に就て幾
 レチャゴフに反問するの止むを得ざりけ
 之が殆ど三時間を要してたり。
 少將の證言を完全にして吾人は
 君が代

其の然たる象徴は人々に勇壯なる
與へたり

文苑

佳羅丹之淺　玉井南軒
○山家新年
さながら年の朝の山早はたゞ静なるものに
○新年松
を松にくくらべて千萬の年を重ねん色

今日は何となく
一では
に取
どうか
子で御
れ金子
す。

は推論に到達するを得べし。防犯線は八落里に及び、一聯隊の戦闘力と餘りに大なるに過ぎたり。而してツッコの壕内に於ける豫備軍は極めて少なり。而もワンチャ、ワフ等が車也故里の



たき
○ある歳旅宿に新年を迎へて
重ぬ夢とはれもほへす一夜計の旅の
「そりの
と云つて
すが、生

「困りましたね、今」

少し腹痛で來られないと云ふ斷書
を的に借
ので、若
の利子を
此上を待

さうに云つて溜息を吐く、するど
は爲吉に向ひ

ま
ん



た金を返す約束が致てござい、ます
も其金を返さなやあ、二箇月分
取られるような事になりますので
ち申す理には行かないんでござい



97-

「はいんですわ。」
聲に聞く、眞吉は其には答へないで
とて、逆も今日の間には合はないの
を面しや逆も今日と云ふ理には行か
ず、で
ませんか
け下さつ
つては誠
山田は
しく、

は失禮ですが、おうなすつて下さい。
兎も角、其の時計を一時私に預
けて、明日にも松岡さんが金子を持
つて来れば直に返し申す事にし
其無禮を怒りながらも、向も断然

私のほうがか誠に困るのです。寶は「これは、
返すに頂けるものとだと思つて、借であ
る約束束縛の居りますので、もう今
に來るのだらうと思つて居りますから
返すに頂きたいものです。ね金
せん、松浦御都合して頂きたいもので
命令がね悪いと仰やるなら、無理に
でなくとも、何でも宜しうございま
す事は能

「今も云ふ通り、父の記念の品で、
 ずっと持つて居るのだから、萬一此品を焼
 けやうな事があれば、異國父兄に課
 問のくるまで持つて下う。」

「時計が可厭なら、何か外の品でも
 下さいませう、どうあつてもた待ち申
 せん。」

形の時計に目を注いで居る。
 物を渡せと云はぬばかり、枕頭にあ
 るを立聞ぬ。「そのな
 と、襖を
 ら誰か

ないの間答中、室外に立つて横子
人の女があつたが、堪かねたか、
金子は、私から拂ひ申します。」
開けて入つてきた、おどろきな
見れば十七八の傑とする程の美人



